二十三　分別發趣道相

解釋分は三段に分れて、顯示正義、對治邪執、分別發趣道相となつてをる、其中初めの二は教理を主として說いたので、大乘の二字に當てれば大の字にあたるが、此分別發趣道相は實踐の方で乘の字にあたると見てもよい、兎に角これからは實踐を主として說くのであるから、別にむづかしい講釋をするにも及ばぬが、ザツト本文を讀んで見る位でわかる、

分別發趣道相者、謂一切諸佛所證之道、一切菩薩、發心修行趣向義故、畧說發心有三種、云何爲三、一者信成就發心、二者解行發心、三者證發心

分別發趣道相とは謂く一切の諸佛、所證の道、一切の菩薩、發心修行し、趣向する義なるが故に、畧して發心を說くに三種有り、云何か三と爲す、一には信成就發心、二には解行發心、三には證發心。

分別發趣道相といふのは、志を起して發心修行して諸佛の證したまひし無上道に趣く行路を分別するので、これを三に分つ、一は信成就發心、二者解行發心、三は證發心で、ツマリ信、解、行、證の四方面より發心して無上道に行くの路で、これを五十二位の階級に配すれば、義記に信成就發心とは位、十住にあり、兼て十信を取る、十信の位の中に信心を修習し、成就して決定心を發して即十住に入る、十信の初心を發心住と名く、即ち十信の行滿つるを信成就と名く、十住の初に進入するが故に義心といふ、解行發心とは位、十回向にあり、兼て十行を取る、十行の位の中に能く法空を解し、順じて十度を行し行成し純熟し廻向心を發して十廻向の位に入る、故に解行發心といふ、證發心とは位、初地已上乃至十地に在り、前の二はこれ相似發心、後の一はこれ眞實發心とあつて、信を以て初入とし、解行之れに次ぎ、證に至つて眞實に道を得るに至るといふので、左の如くに分類して見ることが出來る。

三種の發趣道相
- 信發心（十信十住）……相似發心
- 解行發心（十行十廻向）
- 證發心（初地以上乃至十地）……眞實發心

これから一々に説明してある。

信成就發心者依何等人修何等行得信成就堪能發心所謂依不定聚衆生有熏習善根力故信業果報能起十善厭生死苦欲求無上菩提得値諸佛親承供養修行信心經一萬劫信心成就故諸佛菩薩教令發心或以大悲故能自發心或因正法欲滅以護法因緣故能自發心如是信心成就得發心者入正定聚畢竟不退名住如來種中正因相應若有衆生善根微少久遠已來煩惱深厚雖値於佛亦得供養然起人天種子或起二乘種子設有求大乘者根則不定若進若退或有供養諸佛未經一萬劫於中遇緣亦有發心所謂見佛色相而發其心或因供養衆僧而發其心或因二乘之人教令發心或學他發心如是等發心悉皆不定遇惡因緣或便退失墮二乘地

信成就發心とは何等の人に依り、何等の行を修し、信成就することを得て能く發心するに堪んや、所謂、不定聚の衆生に依るに熏習する善根力有るが故に業果報を信じて能く十善を起し、生死の苦を厭ひ、無上菩提を欲求し、諸佛に値ふことを得て親承供養して信心を修行す、一萬劫を經て信心成就するが故に諸佛菩薩教て發心せしめ、或は大悲を以ての故に能く自から發心し、或は正法の滅せんと欲するに因て、護法の因緣を以ての故に能く自ら發心す、是の如き信心成就して發心を得れば正定聚に入りて畢竟して退かざるを如來種の中に住して正因相應すと名く、若し衆生有つて善根微少にして久遠より已來煩惱深厚なれば、佛に値ふて亦供養することを得と雖も、然も人天の種子を起し、或は二乘の種子を起す、設ひ大乘を求むる者有れども根則ち不定にして若くは進、若くは退す、或は諸佛を供養すること有りて未だ一萬劫を經ず、中に緣に遇つて亦、發心すること有り、所謂、佛の色相を見て其の心を發し、或は衆僧を供養するに因りて其の心を發し、或は二乘の人の教に因りて發心せしめ、或は他を學んで發心す、是の如き等の發心は悉く皆不定なり、惡の因緣に遇はば或は便ち退失し、二乘地に墮す。

何等の人により、何等の行を修し信成就して發心するに堪ふるかとの問を出したので、

第一の何等の人といふに答へて、不定聚の衆生に係るに熏習する善根力あるが故にといふ、（不定聚の衆生とは十住以上信の決定したのをいふので、十信以下のものを邪定聚と名くるのである）これらの人は善根の熏習によつて因果の理を信じて、十善を行ひ生死の苦を厭ひ無上道を求め、諸佛に値ふべき信心を修行して一萬劫を經て、こゝに十住の位に入り信成就したのであるから、諸佛の教に依り大慈悲心を起して人を救はんと欲し、或は正法の滅せんとするのを護らんとして自ら發心するので、かやうに信成就したものは、如來藏の中に入て、佛たるべき正因相應するのである、これに反して善根少く煩惱深ければ、佛に値ふたとて如來の種子を起すことは出來ず、或は人天の種子を起し、或は二乘の種子を起し、假令、大乘を求むる心を起すものがあつても、根機が不定で或は進み或は退く、これは內に善根熏習の力がないからで、卽ち內因が不定である、さて、又、外緣は一萬劫の修行をせざる中に、緣に遇ふて發心することあつても、「佛の色相を見て其心を發し、或は聚僧を供養して其心を發し、或は二乘の人の教に因て發心し、或は他を學んで發心する」ので、皆なこれ菩薩の悲智の心ではない、ソコデ是の如きの發心は悉く皆な不定で、若し

信成就の三心

惡の因緣にでも遇へば其發心が退失するのであると、信成就發心の出來るべき人と出來るべからざる人とを明した。

復次信成就發心者發何等心略說三種云何爲三一者直心正念眞如法故二者深心樂集一切諸善行故三者大悲心欲拔一切衆生苦故

復た次に信成就發心とは何等の心を起す、畧して說に三種有り、云何か三と爲す、一には直心、正しく眞如の法を念ずるが故に、二には深心、樂んで一切の諸の善行を集むるが故に、三には大悲心、一切衆生の苦を拔かんと欲するの故に。

信成就發心は如何なる人に於て出來るかといふことを說いたが、今度はドンナ心を發すのであるかとの問ひである、これに三ある、正しく眞如の法を念じて別の岐路なきこれを直心といふ、直心とはまつすぐな心である、樂んで一切諸の善行を集めて心源に向ふのであるから、これをふかき心、深心といふ、さて其次ぎは一切衆生の苦を拔くといふ大悲心で、これを解し易くいへば、直心は斷じて惡に向はぬといふ心、深心は斷じて善に向ふと

いふ心、大悲心は衆を濟ふといふ心で、此三心こそ大乘佛教者たるものゝ心得べき道德の三ケ條であります、これを三聚淨戒といふのに當てると左の如くなります。

直心＝止惡＝攝律儀戒

深心＝修善＝攝善法戒

大悲心＝攝衆＝攝衆生戒

併しこれは道德的に見たので、こゝでは信仰の上からいふのであるから、先づ第一に直心とて眞實に僞りない心を以て佛を信じ、第二に深心とて疑ひのない深き信仰を持ち、第三には佛の御心を以て心とする大悲心を起し、一切の行ひをして佛と同じやうにしようといふ信仰が必要であります、さてこれに就て一つの問答がある。

問曰上説法界一相、佛體無二何故不唯念眞如、復假求學諸善之行、答曰譬如大摩尼寶、體性明淨、而有鑛穢之垢、若人雖念寶性不以方便種種磨治終無得淨如是衆生眞如之法體性空淨而有無量煩惱垢染、若人雖念眞如不以方便種種熏修亦無得淨、以垢無量無邊徧一切法故修一切善行以爲對治若人修行一切善法自然歸順眞如法故

問ふて曰く上に法界一相、佛體無二なりと說く、何が故ぞ唯だ眞如を念ぜずして復た諸善の行を求學することを假るや、答へて曰く、譬へば大摩尼寶の體性明淨なる鑛穢の垢有り、若し人寶性を念すと雖も方便を以て種々に磨治せざれば、終に淨を得ること無きが如く、是の如き衆生の眞如の法も體性空淨なるも而も無量の煩惱の垢染有り、若し人眞如を念ずと雖も方便を以て種々に熏修せしめざれば亦、淨を得ること無し、垢無量無邊にして一切の法に徧きを以ての故に、一切の善行を修して以て對治と爲す、若し人一切の善法を修行すれば自然に眞如の法に歸順するが故に。

これは上に法界は一相なり佛躰は無二なりといふたではないか、それであるなれば、たゞ眞如を念ずればそれでよいはづである、別に諸の善行をせなければならぬはづはないではないかといふ問である、一應もつともな疑問のやうであるが、これは未だ一を知て二を知らぬのである、譬へば大摩尼寶とて立派な寶玉がある、その體性は明淨であるが、鑛穢の垢ありで、鑛の垢がついてをる、如何に其體性は明淨ぢやといふても、種々にこれを磨か

なければ淨くなることはない、われ〳〵衆生の眞如の法も體性は空淨であるが、いろ〳〵の煩惱の垢がついてをる、そこで、ただ眞如を念じただけでは其體性の淨きことを表はすことは出來ぬ、種々に修行してこれが垢を除かねばならぬ、此垢は無量無邊で一切の法に遍くついてをるから、一切の善行を修してこれを除く、これを除いてしまへば、もとの明皎々たる光を出して眞如に歸順することが出來るのである、さればこそ眞如の法を念ずると共に、諸善の行を忘れてはならぬとは說いてあるのである。

四種方便

略說方便有四種云何爲四一者行根本方便謂觀一切法自性無生離於妄見不住生死觀一切法因緣和合業果不失起於大悲修諸福德攝化衆生不住涅槃以隨順法性無住故

略して方便を說くに四種有り、云何か、四と爲す、一には行根本法便、謂く、一切の法自性無生と觀じ、妄見を離れて生死に住せず、一切の法、因緣和合の業果失せずと觀じ、大悲を起し、諸の福德を修し、衆生を攝化して涅槃に住せず、法性の無住に隨順するを以ての故に。

隨順

眞如を念じて諸善を行ふの方便に四つある、その一は行根本方便で、これは一切の法の其自性は不生不滅のものであると觀じて、分別の妄見を離れて生だの死だのといふことに心を住めず、一切の現象は皆なこれ不生不滅の本體の上に、因緣の和合によつて出來たものので、因果の關係はかわらざるものなりと觀じて、大慈悲を起し諸の福德を修して衆生を攝化してゆくので、涅槃に住まらずして應用自在に(悲)生死に住まらずして、妄見を離れるので(智)悲智圓滿になる、これを行根方便といひ又無住行と申します。

二者能止方便謂慚愧悔過能止一切惡法不令增長以隨順法性離諸過故

二には能止の方便、謂く慚愧悔過して能く一切の惡法を止めて增長せしめず、法性の諸過を離るゝに隨順するを以ての故に。

こは能止の方便といふので、あゝ惡かつたと悔ひ改めて能く一切の惡法を止めてこれを增長せしめぬやうにして、法性の諸の過失を離るゝやうにしてゆくので、これは法性を止持する消極的のやりかたである。

三者發起善根增長方便、謂勤供養禮拜三寶讚歎隨喜勸請諸佛以愛敬三寶淳厚心故信得增長乃能志求無上之道又因佛法僧力所護故能消業障善根不退以隨順法性離癡障故

三には發起善根增長方便、謂く勤めて三寶を供養し禮拜し、諸佛を讚歎し、隨喜し勸請す、三寶を敬愛する淳厚の心を以ての故に信增長することを得、乃ち能く無上の道を忘れず、又佛法僧の力に護せらるゝに因るが故に能く業障を消して善根退かず、法性の癡障を離るゝに隨順するを以ての故に。

これは第三の發起善根增長方便であつて、唯だ消極的に法性を支持するだけでなく、積極的に三寶を供養禮拜し、諸佛を讚歎隨喜歡請し、三寶を愛敬する淳厚(あつき)の心を以て、信念がますゝ增長して無上道を求め、佛法僧(三寶)の加被によつて業障を消して善根退かざるやうになるので、善を增し惡を止めてゆくのである。

四者大願平等方便所謂發願盡於未來化度一切衆生使無有餘皆令究竟無餘涅槃以隨順法性無斷絶故法性廣大徧一切衆生平等無二不念彼此究竟寂滅故

四には大願平等方便、所謂發願して未來を盡し、一切衆生を化度するに余り有ること無からしめ究竟して無餘涅槃せしむ、法性斷絶なきに隨順するを以ての故に、法性廣大にして一切の衆生に徧くして平等無二なり、彼此を念せず、究竟寂滅の故に。

これは大願平等方便で、未來を盡くしといふのは、いつまでと時間に制限なく、無限に一切衆生を化度するので、餘あることなしとあるは、空間的一切に亘る廣大なることをいふので、此時間此空間に亘りて究竟して無餘涅槃に入らしめんとするのが此の大願平等方便で、法性の時間に限なく(斷絶なし)空間に限りなく(廣大)、平等無二にして、彼此の區別を念ぜざるやうなのです、以上四の方便の中、初めの一は根本で、其次ぎの二つは自利後の一は利他であります、これを見易くすると。

- 方便
  - 根本方便＝行根本方便
  - 二利圓滿
    - 自利
      - 能止方便＝斷德
      - 發起善根增長方便＝智德

（利他＝大願平等方便＝悲德

といふやうになり、かくて三德圓滿する、さてこれより其發心利益を明するので。

菩薩發是心故則得少分見於法身以見法身故隨其願力能現八種利益衆生所謂從兜率天退入胎住胎出胎出家成道轉法輪入於涅槃然是菩薩未名法身以其過去無量世來有漏之業未能決斷隨其所生與微苦相應亦非業繫以有大願自在力故如修多羅中或說有退墮惡趣者非其實退但爲初學菩薩未入正位而懈怠者恐怖令彼勇猛故又是菩薩一發心後遠離怯弱畢竟不畏墮二乘地若聞無量無邊阿僧祇劫勤苦難行乃得涅槃亦不怯弱以信知一切法從本已來自涅槃故

信發心の利益

菩薩、是の心を發するが故に則ち少分法身を見ることを得、法身を見るを以ての故に其の願力に隨つて能く八種を現じて衆生を利益す、所謂、兜率天より退き入胎し、住胎し、出胎し、出家し、成道し、轉法輪し、涅槃に入る、然るに是の菩薩、未だ法身と名けず、其の過去無量世より來、有漏の業未だ決斷し能はざるを以て其の所生に隨て微苦と相應す、亦、業繫に非ず、大願自在の力有るを以ての故に、修多羅の中に或は惡趣に退墮する者有りと說くが如きは其の實退に非ず、但だ初學の菩薩未だ正位に入らず、懈怠する者に恐怖せしめ、彼をして勇猛ならしめん爲の故に、又是の菩薩は一たび發心して後、怯弱を遠離して畢竟して二乘地に墮ることを畏れず、若し無量無邊阿僧祇劫に勤苦難行して乃ち涅槃を得と聞くとも亦、怯弱ならず、一切の法本より已來自から涅槃なりと信知するを以ての故に。

此發心の菩薩は未だ法身の全分を見ることは出來ないが、已に眞如の理かくあるべしと思惟してをるのであるから、其の眞如を仰慕する願力によつて、能く八相を現はして衆生を利益することが出來る、それは（一）兜率天より退き、（二）人身に入胎し、（三）住胎し、（四）出胎し、（五）出家し、（六）成道し、（七）轉法輪と敎を說き、（八）入涅槃するので、生あり滅あるから未だ法身といふことは出來ぬ、過去無量世の迷の結果が未だ全く斷ぜられぬから微苦がある、けれども、是は決してわれ〳〵凡夫の受くるやうな業繫苦ではない、そこが凡夫と異ると

ころだ、これは應身を說て其利益を形容したのであります、お經の中に、これらの菩薩の中には惡趣に退くものがあると說いてあるが、それは初學の菩薩が未だ正位に入らずして、懈怠するものを奬勵せしめんが爲めに云はれたので、其實退くのではありませぬ、よしかゝることありとも、これらの菩薩は發心の後は怯弱といふ心がございませぬから卑怯な弱いことはなく、非常な難苦難行をせなければ涅槃を得られぬといふても、少しもそれの爲めにひるむことはない、それは何故かといふに、一切の法は本より自ら涅槃であるといふ眞理を信じてをるからであります、この次ぎは解行發心

解行發心

解行發心者、當知轉勝以、是菩薩從初正信已來、於第一阿僧祇劫、將欲滿故、於眞如法中、深解現前所修離相以知法性體無慳貪故隨順修行檀波羅蜜、以知法性無染離五欲過故隨順修行尸羅波羅蜜、以知法性無苦離瞋惱故隨順修行羼提波羅蜜、以知法性無身心相離懈怠故隨順修行毗黎耶波羅蜜、以知法性常定體無亂故隨順修行禪波羅蜜、以知法性體明離無明故隨順修行般若波羅蜜

解行發心とは當に知るべし轉た勝なり、是の菩薩は初めの正信より已來第一阿僧祇劫に於て將に滿せんと欲するを以ての故に、眞如の法中に於て深解現前して所修、相を離る、法性の體は慳貪無きを知るを以ての故に隨順して檀波羅蜜を修行す、法性は無染にして五欲の過を離るゝを知るを以ての故に、隨順して尸波羅蜜を修行す、法性は無苦にして瞋惱を離るゝを知るを以ての故に隨順して羼提波羅蜜を修行す、法性は身心の相無く懈怠を離るゝを知るを以ての故に隨順して毗黎耶波羅蜜を修行す、法性は常定にして體、亂無きを知るを以ての故に、隨順して禪波羅蜜を修行す、法性は體明にして無明を離るゝを知るを以ての故に隨順して般若波羅蜜を修行す。

とある、先の信成就發心は眞如に對する信念を固めるまでで、未だ眞如を證得するには至らなかつたが、此の解行發心に至ては未だ明了には證得することが出來ぬが、略ぼ其深旨を理解することの出來る、十行十回向の位であるから將に滿せんとすで、初地に隣りして來たので眞如の法中に於て深解現前して修むる所、相を離るゝに至る、そこで法性眞如の理に隨順して妙聞を盡くすことが出來る、此菩薩の修行が六波羅蜜である、六波羅蜜は

悉くこれ法性に隨順したる行爲で、輕々に看るべきではござりませぬ、法性眞如の體といふものは差別を超えてをるのですから、慳貪とて貪る心や惜む心はない、我れの彼れのと區別を立てるから、慳貪の心が起るので、一味平等の上にはかゝることはない、そこで施し合ひ惠み合ふ檀波羅蜜といふことを修行するので、波羅蜜は到彼岸の意であることは前にいふた如くですが、檀といふのは檀那とつゞくので天竺の語、支那に譯して布施といふのであります、布施とは施し合ひ惠み合ふ慈悲のことです、太陽は赫々としてわれ〳〵に光と熱とを施し、水は潺々として濕を施す、天地すべてこれ布施の姿であります、道元禪師の御語に「布施とは貪らざるなり」とある、この貪らざるは眞に檀波羅蜜です、眞如法性は染汚なく、宇宙自然の規律、何の過るところもない、この道理に隨順して尸羅波羅蜜を修行する、尸羅は矢張梵語で、支那に譯して持戒だ、日の日々東より出で、月の夜々西に入るが如く、宇宙には過るべからざる規律がある、これに隨順してゆくのが尸羅波羅蜜、それから次ぎが羼提波羅蜜で、これは眞如法性は苦といふことがない、苦といふことがないから腹を立るといふことがない、これに隨順して忍辱といふことを修行せねばならぬ、

六波羅蜜

羼提とは辱を忍ぶ卽ち忍耐の精神だ、眞如法性は死物ではない活物であるが故に、よし身心の相を離るゝとも、活動して止むときがない、卽ち懈怠と怠ることはない、故に毗黎耶波羅蜜とて精進と精しく進んで勉强してゆかねばならぬ、法性眞如は常住にして亂るゝことはない、こゝに於て心を散亂せしめぬやうに禪波羅蜜を修行せねばならぬ、禪はくわしくは禪那、支那に譯して靜慮といふので、靜かに慮るで、心を靜めてゆくことだ、其次ぎは般若波羅蜜で、般若とは智慧、眞如法性の明皎々として無明を離るゝが如くに、智慧の光をいだしてゆかねばならぬ、これを解し易く示すと、

六波羅蜜
- 檀（布施）慈悲――無慳貪
- 尸羅（持戒）規律――無五欲過
- 羼提（忍辱）忍耐――離瞋惱
- 毗黎耶（精進）勉强――離懈怠
- 禪（禪定）靜思――無亂想
- 般若（智慧）智識――離無明

此の如く六波羅蜜の深理を解して修行してゆくのが此の解行發心です。次ぎは

證發心者從淨心地乃至菩薩究竟地證何境界所謂眞如以依轉識說爲境界而此證者無有境界唯眞如智名爲法身是菩薩於一念頃能至十方無餘世界供養諸佛請轉法輪唯爲開導利益衆生不依文字或示超地速成正覺以爲怯弱衆生故或說我於無量阿僧祇劫當成佛道以爲懈慢衆生故能示如是無數方便不可思議而實菩薩種性根等發心則等所證亦等無有超過之法以一切菩薩皆經三阿僧祇劫故但隨衆生世界不同所見所聞根欲性異故示「所行」亦有差別

證發心とは淨心地より乃至菩薩究竟地に何の境界をか證する、所謂眞如なり、轉識に依るを以て境界と爲す、而して此の證とは境界有ること無し、唯だ眞如智を名けて法身と爲す、是の菩薩、一念の頃に於て能く十方無餘の世界に至りて諸佛を供養し轉法輪を請ず、唯だ衆生を開導し、利益せんが爲に文字に依らず、或は地を超えて速に正覺を成ずるを示す、怯弱の衆生の爲なるを以ての故に能く此の如き無數の方便を示す、不可思議なり、而して實に菩薩の種性根等しく、發心則ち等しく所證亦た等しく、超過の法有ること無し、一切の菩薩皆な三阿僧祇劫を經るを以ての故に、但だ衆生世界同じからず、所見所聞、根欲性異なるに隨ふ故に、所行を示すこと亦差別あり。

證發心といふのは解行發心の時は、未だ眞如の實際を證得するには至らなかつたが、今は全く眞如を直角するやうになつたので、初地以上でありまするで、其所證の境界は眞如であります、併し此場合には能證の所證のといふことはない、眞如と一枚になつてをるのであるから、境界といふものがあるべきではない、轉識によつて假りに境界といふのであるが、其實は眞如を證得するの智そのまゝに法身であるのである、已に眞如と同體となることが出來るのであるから、其妙用も亦自由自在である、それを形容して「是の菩薩一念の頃に於て、能く十方無餘の世界に至て諸佛を供養し、轉法輪を請じ、衆生を開導し、利益せんが爲めに、文字に依らず、怯弱なる衆生の爲めの故に、或は地を超えて速に正覺を成

ずと示し、懈慢の衆生の爲めの故に、或は我無量阿僧祇劫に於て當に佛道を成ずべしと說くなぞ、是の如き無數の方便を示す不可思議なり」といふてある、これは證發心の菩薩の妙用を形容したのである、これらのことを一々に講釋をして牽强付會の辯を弄するのは、われ〳〵の好むところではありませぬ、私はたゞ發心の效果を示したものと見てよからうと思ふのです、さて尙ほ形容はつゞけられてをる、かく眞如の本體玲瓏たるを證得するのであるから、其證得する因たる菩薩の種性も等く、其行たる發心も等しく、其證得の時も皆な等しいのであるが、たゞ衆生の世界が同じからず、其見る所の根機が異なつてをるのであるから、所行を示すこともいろ〳〵な差別があるのである。

又是菩薩發心相者有三種心微細之相云何爲三一者眞心無分別故二者方便心自然偏行利益衆生故三者業識心微細起滅故又是菩薩功德成滿於色究竟處示一切世間最高大身謂以一念相應慧無明頓盡名一切種智自然

而有不思議業能現十方利益衆生

又、是の菩薩の發心の相とは三種の心の微細の相有り、云何か三と爲す、一には眞心無分別の故に、二には方便心自然に徧行して衆生を利益する故に、三には業識心微細に起滅するが故に、又是の菩薩は功德成滿して色究竟處に於て一切世間最高大身を示す、謂く一念相應の慧を以て無明頓に盡くすを一切種智と名く、自然に不思議業有て能く十方に現じて衆生を利益す。

これからは是の菩薩の發心の相を示したのであるが、初地以前のやうに麁雜なる發心ではない、そこで微細の相ありと先づ初地以前と區別し、さて其發心の相の一は眞心とて妄想分別を離れたまことの心、卽ち眞如と相應したる心である、これは根本智、二は方便心として自然に衆生利益の行を爲すのでこれは後得智である、此二智起るの時、細かに心に起滅が起つて未だ佛地の純淨なるのと同じくない、これを三の業識心といふ、これは佛地に比してこそ起滅とはいふのであるが、極く微細なものであるのが此發心でありますから、最早や功德圓滿して因位は窮り、色究竟處に於て果位たる佛地が現はれて、一切世間の最大高身を示すといふやうになつた、かういふ次第であるから、一念の始覺は早や本覺に相

應するやうになつて、またそれで一念相應の慧を以て無明頓に盡くで、無明の曇といふものは少しもない、明皎々たる本覺の一切を照らす、これを一切種智と申します、この一切種智によつて種々の妙用があつて、一切衆生を利益することが出來るやうになる、まことにこれ佛となるの道であります。

一切種智

問曰、虛空無邊故、世界無邊、世界無邊故、衆生無邊、衆生無邊故、心行差別亦復無邊如是、境界不可分齊、難知難解若無明斷無有心想、云何能名一切種智

問うて曰く虛空無邊なるが故に世界無邊なり、世界無邊なるが故に衆生無邊なり、衆生無邊なるが故に心行の差別あり、亦復た無邊なり、是の如きの境界、分齊す可からず、知り難く、解し難し、若し無明斷ぜば心相有ること無し、云何ぞ能く一切種智と名けん。

そこで其一切種智といふことに就ての疑ひである、それは虛空のある所に世界あり、世界のある所に衆生あり、衆生のある所に心行の差別ありとせば、これらは皆な無邊と限りがないのである、限りがなければ境界に限りつけることは出來ぬ、分齊すべからずぢや、たゞに外境が無邊にして知り難く解し難きのみならず、內にある所の心想といふものも、無明を斷ぜば別にあるべきでない、然るを能くこの無邊の境を知解する一切種智と名くることが出來るか、何うか。

答曰、一切境界本來一心離於想念、以衆生妄見境界故心有分齊、以妄起想念不稱法性故不能決了、諸佛如來離於見相、無所不徧心眞實故、即是諸法之性、自體顯照一切妄法、有大智用無量方便、隨諸衆生所應得解、皆能開示種種法義、是故得名一切種智

答て曰く、一切の境界は本來一心にして相念を離る、衆生妄りに境界を見るを以ての故に、心に分齊有り、妄りに相念を起して法性に稱はざるを以ての故に決了する能はず、諸佛如來は見相を離れて徧せざる所無し、心眞實の故に卽ち是れ諸法の性なり、自體一切の妄法を顯照す、大智用無量の方便有りて諸の衆生の應に得解すべき所に隨つて、皆な能く種々の法義を開示す、是の故に一切種智と名くることを得。

答ていふ、内に妄想の心がなくなるから能く廣く知ることが出來るので、一切の境界は本來一心であるから、如何に無邊の境地も一心を出でないのである、今心源を證得したのであるから無邊の境界は、了得することの出來ぬ苦はない、然るに衆生は妄に分別を起して境界を見るから、心に分齊があつて法性無邊に稱はぬものである、故に決了する能はずで、見ざる所が出來るのであるが、諸佛如來は見相といふものがないから徧せざる所なしと無邊である、この無邊なるところこそ諸法の本性で明皎々たる鏡ぢや、さればそれ一切の妄法を照らして大智用無量の方便ありで、いろ〳〵の妙用がある、それであるから諸の衆生の解し易いやうに種々の法義を示してゆくことが出來る、それを一切種智といふのである。

さて又、

又問曰、若諸佛有自然業能現一切處、利益衆生者、一切衆生若見其身、若覩神變、若聞其說、無不得利、云何世間多不能見。

又、問うて曰く、若し諸佛自然の業有りて能く一切處に現して衆生を利益せば、一切衆生若くは其の身を見、若くは神變を覩、若くは其の說を聞いて利を得ざること無けん、云何ぞ世間に多く見ること能はざるや。

これは諸佛が能く一切の處に現じて衆生を利益したまふのであるならば、一切の衆生が、或は其御身體を見、或は不思議なる神變を見、或は其說を聞て、利益を得ぬものはない筈である、然るに世間に多くこれを見ることが出來ぬのはどういふわけであらう、との問ひである。

答曰、諸佛如來法身、平等徧一切處、無有作意、故說自然、但衆生心現、衆生心者、猶如於鏡、鏡若有垢、色像不現、如是、依衆生心若有垢、法身不現故

答て曰く、諸佛如來の法身は平等に一切處に徧して作意有ること無し、故に自然と說く、但だ衆生の心に依つて現ず、衆生の心は猶ほ鏡の如し、鏡若し垢有れば色像現ぜず、是の如く衆生の心に若し垢有れば法身現ぜざるが故に。

これは明白であります、諸佛の法身は一切處に徧きもので、別にどこは照らさうの、何處は照らさぬのといふ作意はないのだが、衆生の心に曇りがあるからこれを見ることが出來ぬので、太陽の光は赫々たるも盲者はこれを見ることの出來ぬやうなものである、それを喩へれば鏡のやうなものぢや、この鏡に少しでも垢があれば色像は現はれぬ、衆生の心に垢があれば法身は現じないのである、これで大層長かつた解釋分を終りました。

二十四　修行信心分

これからは修行信心分であります、これ亦むづかしい教理でなく、實際の修行を示したのでありますから、通讀しても別段に其義理のわからぬといふ程ではありませぬ、

已說解釋分、次說修行信心分、是中依未入正定聚衆生故、說修行信心

已に解釋分を說く、次に修行信心分を說かん、是の中に未だ正定聚に入らざる衆生に依るが故に修行信心を說く。

これは讀んで字の如くで、未だ正定聚に入らざる衆生といふのは、これに二つあつて、一は信を修すること充分なるもので、これには發趣道相を說て正定に入らしむるが、今一は信を修すること未だ滿たざるもので、これらに對しては此修行信心分によつて四信五行のことを說き、それをして修行せしめ、信成滿せしめ、それから發趣道相によつて正定聚に入らしむるといふ順序である、併しそういふ面倒な詮索は他日に讓つて、こゝには前節に次で一心二門三大の深意を會し、これを信じ行はしむる方法を說くのであると見てよい。

何等信心、云何修行、略說信心有四種、云何爲四、一者信根本、所謂樂念眞如法故、二者信佛有無量功德、常念親近供養恭敬、發起善根願求一切智故、三者信法有大利益、常念修業諸波羅蜜故、四者信僧能正修行自利利他、常樂親近諸菩薩衆、求學如實行故

何等の信心、云何んか修行する、略して信心を說くに四種有り、云何か四となす、一には根本を信

ず、所謂、眞如の法を樂念するが故に、二には佛に無量の功德有りと信じ、常に信じて親近し、供養し、恭敬して善根を發起し、一切智を願求するが故に、三には法に大利益有りと信じ、常に念じて諸波羅蜜を修行するが故に、四には僧能く正しく自利利他を修行すと信じて、常に樂んで諸の菩薩衆に親近して、如實の行を求學するが故に。

これは四信の説明で、四信とは一に宇宙の根本たる眞如を信ずるので、單にこれを信ずるのみならずこれを樂念觀察する、この眞如の三方面が佛法僧となるので、二は佛に無量の功德ありと信じ、常にこれに親しみ、一切智を願ひ求め、もろ〳〵の善根を起すのである、これは無限の時間を貫き、無限の空間に亙る宇宙の本體たる眞如を信じてゆくので、其眞如が萬象に隨緣してさま〴〵の現相となり、こゝに宇宙の秩序となり規律となる、これを法といふので、此法に大利益ありと信じ、此法に隨ふの行ひを爲すのが、第三です、第四は此宇宙和合の狀態を念じ、本體現相が相和してゆき、互に自利となり利他となりて影響してゆくやうに世を濟ふの行ひを爲し、此佛の法を奉ぜるもろ〳〵の菩薩方に親み近いて、如實の行を求學するのである、此眞如を信じ、法を信じ、僧を信ずるのを四信といふので、やがて一心二門三大の原理を信じてこれを應用してゆくことである、されども今は實踐方面からいふのであるから、眞如の本體を人格的に佛といひ、現相を萬有的に法といひ、妙用を倫理的に僧といふたのである、更らに手近くいへば、理想的に佛といひ、理論的に法といひ、現實的に僧といふたのと見てもよいし、又佛といふは體、法といふは相、僧といふは用と見てよい、佛は梵語佛陀、支那に覺者と譯す、眞如平等の理を覺つた御方だ、卽ち眞如と同一になつたので、法は軌持の義で萬有の規律、眞理の顯現、僧は詳しくは僧伽、譯して和合衆といふ、宇宙調和の理法である、此佛法僧を三寶といふので、これを宇宙眞理の三方面と見るのは同體三寶、此眞理を顯示して下された御方卽ち敎祖を佛とし、其敎理を法とし其敎團を僧とするのは現前三寶、其狀態を今日に住持して居るのが木佛金佛畫像の佛、黃卷赤軸の經文、(法) 圓頂方袍の僧である、これを住持三寶といひ佛敎信仰の對象となるのであるが、こゝには眞如の三方面として圖にすれば、

眞如(根本)
- 佛＝人格的＝理想的
- 法＝萬有的＝理論的
- 僧＝倫理的＝現實的

となるのである。

修行有五門、能成此信、云何爲五、一者施門、二者戒門、三者忍門、四者進門、五者止觀門、云何修行施門、若見一切來求索者、所有財物隨力施與、以自捨慳貪令彼歡喜、若見厄難恐怖危逼隨己堪任施與無畏、若有衆生來求法者隨己能解、方便爲說、不應貪求名利恭敬、唯念自利利他、廻向菩提、故

修行に五門有り、能く此の信を成す、云何か五と爲す、一には施門、二には戒門、三には忍門、四には進門、五には止觀門なり、云何か施門を修行する、若し一切の來りて求め索むる者を見ば有らゆる財物、力に隨つて施與す、自から慳貪を捨つるを以て彼をして歡喜せしむ、若し厄難恐怖危逼を見ば己が堪任するに隨つて無畏を施與す、若し衆生の來りて法を求むる者有らば己が能く解するに隨つて方便して爲に說て名利恭敬を貪求すべからず、唯だ自利利他を念じ菩提に廻向するが故に。

信と行とは相待つもので、信があつても行がなければ信が堅くない、眞に信ずるのは眞

に行ふのであるからこゝに五行を擧げたのだが、此五行は六波羅蜜の中の智慧と禪定とを除いて、止觀を加へて五つとしたので、禪定と智慧とは一對のものであるからこれを合して止觀門とし、一心二門三大四信五行と記憶し易からしむるやうにしたのである、此六波羅蜜のことは發趣道相の終りに說いたのであるから、こゝには極く略して御話すること、する、第一の旋門といふのは布施で、これに三あります、若し人の來りて財物を求むるものには力に隨てこれを施し、自分の慳貪の心を捨てゝ人をして歡喜しむるのでこれを財施といひます、又人が厄難や恐怖の爲めに危くなつてをる時には身を挺でゝこれを助ける、これを無畏を施すというて、名けて無畏施と申します、卽ち人をして畏れ無きを得しむるのです、其次ぎは法施でこれは法を求めるものがありますれば、少しも惜まず叮嚀に說き示して名利を貪る心を止め、自利々他の行をなさんと念はしめ、菩提の道に向はしむるをいふのです、ツマリ布施に三あり、一を財施、二を無畏施、三を法施といふので、皆な他に施す慈悲を本とするのです、これを或る人が財施は仁、無畏施は勇、法施は智、この三は直に智仁勇の三德となるといふたことがあります、チョツト面白い觀察です。

布施（財施（仁）、法施（智）、無畏施（勇））

云何修行戒門、所謂不殺、不盗、不婬、不兩舌、不惡口、不妄語、不綺語、遠離貪嫉、欺詐、諂曲、瞋恚、邪見、若出家者、爲折伏煩惱故、亦應遠離憒閙、常處寂靜修習少欲知足頭陀等行、乃至小罪、心生怖畏、慚愧改悔、不得輕於如來所制禁戒、當護譏嫌、不令衆生妄起過罪故

云何か戒門を修行する、所謂不殺、不盗、不婬、不兩舌、不惡口、不妄語、不綺語にして、貪嫉、欺詐、諂曲、瞋恚、邪見を遠離す、若し出家は煩惱を折伏せんが爲めの故に亦應に憒閙を遠離し、常に寂靜に處して少欲、知足、頭陀等の行を修習し、乃至小罪にも心、怖畏を生じて慚愧し、改悔して如來所制の禁戒を輕んずることを得ざるべし、當に譏嫌を護りて衆生をして妄りに過罪を起さしめざるが故に。

これは持戒の説明です、佛の戒法は大に分ちて三とします、一は攝律儀戒で佛の戒を守りて惡をせぬといふので、これにはいろ〳〵ありますが、大抵十善戒とて十を擧げます、それは不殺生、不偸盗、不邪婬、不兩舌、不惡口、不妄語、不綺語、不邪見である、この十善のことを知るには、慈雲律師の「十善法語」がよろしい、さて今はズツトこれを並べて不綺語まで至り、貪欲、詐欺、諂曲、瞋恚、邪見を遠離すといふて一切の惡を止めてある、貪欲とムサボル心や、欺詐とイツハル心、諂曲とヘツラフ心、瞋恚と腹立ち、邪見と正しくない心を離れるのが必要ぢや、十善戒の方では其中の主なる貪と瞋と邪見との三を擧げて居る、此三つは惡をなすの本たる心、これを意三といひ、兩舌（俗にいふ二枚舌）惡口（わるくち）妄語（うそ）不綺語（かざりある言）は口でつくる惡であるからこれを口四といひ、殺生、偸盗、邪婬は身で行ふのであるから身三といひます。

十惡（身（殺生、偸盗、邪婬）、口（兩舌、惡口、妄語、綺語）、意（慳貪、瞋恚、邪見））三業

これらは皆な攝律儀戒に含まれるので、二を攝善法戒といひます、これは佛の戒法に從うて善を行ひ、出家なれば鬧がしい所を離れて、靜かに佛の說かせられた通りに行ふて、小さな罪でもこれを怖れて、少しも佛の禁戒を輕んぜずに修してゆくのです、さて三は攝衆生戒でこれは自分が戒を守るばかりでなく、衆生をして妄りに罪を起さしめぬやうにするので、これを此文に配當すると、若出家より上の文は攝律儀戒、以下は攝善法戒で、終りの當護譏嫌、以下は攝衆生戒に當るのです。

云何修行忍門、所謂應忍他人之惱心不懷報、亦當忍於利衰毀譽稱譏苦樂等法故

云何か忍門を修行する、所謂、應に他人の惱を忍んで心に報を懷かざるべし、亦當に利衰毀譽稱譏苦樂等の法を忍ぶべきが故に。

忍はシノブ、言ふまでもなく忍耐のことで、如何に他人が自分を惱すことがあつても、それが爲めに少しも復讐なぞの心を抱かぬので、これを他不饒益忍といひます、他に饒益なら

らざるを忍ぶのです、亦利害や毀譽や稱譏や苦樂等の爲めに心を動かさぬので、これを安受忍といひます、譏るものは譏れ、笑ふものは笑へ、自ら信ずる所は行ふのであるといふ堅忍不拔の精神がなければ、大乘佛敎の修行は出來るものではありませぬ、さてまた此精神は堅く大乘を信ずる念によつて行はるゝのであります、即ち忍辱は他に對しては他不饒益忍となり、自に對しては安受忍となる、

忍 ｛自＝安受忍 ／ 他＝他不饒益忍｝

云何修行進門、所謂於諸善事心不懈退、立志堅强、遠離怯弱、當念過去久遠已來、虛受一切身心大苦、無有利益、是故應勤修諸功德、自利利他、速離衆苦、復次若人雖修行信心、以從先世來多有重罪惡業障故、爲邪魔諸鬼之所惱亂、或爲世間事務、種種牽纏、或爲病苦、所惱、有如是等衆多障礙、

是故應當勇猛精勤晝夜六時禮拜諸佛、誠心懺悔勸請、隨喜廻向菩提、常不休廢得免諸障善根增長故

云何か進門を修行する、所謂、諸の善事に於て心懈退せず、志を立つること堅强にして怯弱を遠離し、當に過去久遠已來、虛く一切身心の大苦を受けて利益有ること無きを念ふべし、是の故に應に勤めて諸の功德を修め自利利他して速かに衆苦を離るべし、復た次に、苦し人信心を修行すると雖も先世より來、多く重罪惡業障有るを以ての故に、邪魔諸鬼の爲めに惱亂せらる、或は世間事務の爲めに種々牽纏せらる、或は病苦の爲めに惱まさる、是の如き等の衆多の障礙有り、是の故に當に勇猛精勤して晝夜六時に諸佛を禮拜し、誠心に懺悔し勸請し隨喜して菩提に廻向すべし、當に休廢せず、諸障を免れて善根增長するを得るが故に。

これは第四の精進で、諸の善事に於て怠ることなく、(これを勤勇精進といひます)志を立つるいと堅く强く、卑怯なることなく、(これを難壞精進といひます)我は過去劫來虛しく大苦を受けてをることを念ひ、諸の功德を積んで自利利他の行ひをして、衆苦を離るゝやうにせねばなりませぬ、(これを無息精進といひます)卽ち精進は

勤勇＝努力
難壞＝堅守
無足＝不息

凡そわれ〳〵が信心を修行しやうといひましても、先きの世より積み累なつた罪惡の障の爲めに、さま〴〵なものに惱まされ、又は世間の俗務の爲めに、いろ〳〵の邪魔が出來たり、病氣の爲めにいふやうにならなかつたりして勉强することが出來ませぬ、それでありますから益々奮發して「是の故に勇猛精進して晝夜六時に諸佛を禮拜し誠心に懺悔し」云々とありまする通り、心の奥からあゝ惡かつたと懺悔して善事に向つて進んで、菩提の道に入ることをつとめて少しも休んではなりませぬ、かくすれば「諸障を免れ、善根を增長す、」でもろ〳〵の障りもなく善根を增すことが出來るのです。

云何修行止觀門所言止者、謂止一切境界相、隨順奢摩他觀義故、所言觀者、謂分別因緣生滅相、隨順毗鉢舍那觀義

故云何隨順以此二義漸漸修習不相捨離雙現前故

云何か止觀門を修行する、言ふ所の止とは謂く一切の境界の相を止めて奢摩他觀に隨順する義の故に、言ふ所の觀とは謂く因緣生滅相を分別して毗鉢舍那の觀に隨順する義の故に、云何か隨順する、此の二義、漸々に修習して相ひ捨離せざるを以て雙へて現前するが故に。

これからは止觀門で、止といふのは一切境界の相を止むで、われ〳〵が心にはさま〴〵な外境（客觀）があつて、其爲めに心がさま〳〵に變る、これを一處に定住して動かざるやうにするのが止ぢや、奢摩他といふのは梵語で止といふこと、毗鉢舍那といふのも矢張梵語で同じ意味であります、觀といふのは因緣生滅の相を分別して無分別智に至るので、止といひ觀といふ二つであるやうだが、其實は一心の上のことで、散亂の心を止め、不顚倒の相を觀察するのである、さて如何にして此止觀を修するかといふことが次ぎの說明である。

若修止者、住於靜處、端坐正意、不依氣息、不依形色、不依於空、不依地水火風、乃至不依見聞覺知、一切諸想、隨念皆除、

三昧の方法

亦遣除想、以一切法本來無想、念念不生、念々不滅、亦常不得隨心外念境界後以心除心。心若馳散、卽當攝來住於正念、是正念者、當知唯心無外、境界卽復此心亦無自相、念念不可得、若從坐起、去來進止有所施作、於一切時常念方便、隨順觀察、久習淳熟、其心得住、以心住故、漸漸猛利、隨順得入眞如三昧、深伏煩惱、信心增長、速成不退、唯除疑惑、不信、誹謗、重罪、業障、我慢、懈怠、如是等人、所不能入、

若し止を信ずる者は靜處に住して端坐して意を正す、氣息に依らず、形色に依らず、空に依らず、地、水、火、風に依らず、乃至、見聞覺知に依らず、一切の諸想、念に隨つて皆な除き、亦除想を遣る、一切の法本來無想を以て念々生ぜず、念々滅せず、亦常に心外に隨つて境界を念じ、後、心を以て心を除くことを得ず、心若し馳散せば卽ち當に攝し來つて正念に住すべし、是の正念とは當に知るべし、唯心にして外の境界無し、卽ち復た此の心亦た自相無し、念々不可得なり、若し坐より起つて去來進止に施作する所有れば一切の時に於て常に方便を念じて隨順觀察すべし、久習淳熟

すれば其の心住することを得、心、住するを以ての故に漸々に猛利にして眞如三昧に隨順し、得入し、深く煩惱を伏し、信心增長して遠かに不退を感ず、唯だ疑惑、不信、誹謗、重罪、業障、我慢、懈怠を除く、是の如き等の人は入ること能はざる所なり。

これは止觀の方法を示したので、止觀をせむとするものは靜かな處に坐つて意を正しくするので、これも精しくいへばいろ〳〵あるがザツと御話いたせば、靜かな處、山中なぞなれば殊によい、そこで結跏趺坐なり半跏趺坐なりをするので、其坐りかたにもいろ〳〵の法があるが、マー正しく坐るのであると思うてをればよい、氣息に依らずといふのは息を數へて心を靜める、其氣息にも依らず、形色に依らず、空に依らず、地水火風に依らずといふのは、すべての客觀の爲めに心を動かさぬやうにし、又見聞覺知に依らずして、すべての主觀によつて心を動かさぬやうにし、一切の諸想は念ふに隨てこれを除き、又其除くといふ考も捨てゝしまつて、法性本來の相に隨順して念々不生、念々不滅の本躰に入るので、想にあらず、無想にあらず、寂然たる天地の當躰といふやうになるのです、かくなれば心外の境なし、故に心の其境に執することがない、其境に執することがないから、心を以て心を除くといふやうなことはいらぬ、若し心が散ればこれを攝めて正念に住せしむる、此正念といふのは本來唯心で外の境界はない、啻に外の境界がないのみでない、心そのものゝ自相だもない、心を持ち來れ、不可得なりである、常に修行をしてこれを一切の仕事に應用してゆけば、外物の爲めに心を動かされることなく、心却て外物を制するやうになる、されば「久習淳熟すれば其心住まることを得、心住るを以ての故に漸々に猛利にして眞如の深旨に入り、煩惱を伏して信心はます〳〵增長して退くことはないやうになる、併し疑惑、不信、誹謗、重罪、業障、我慢、懈怠の六罪の中、一罪でもあるものは如何に止觀を修しても眞如三昧に入る事は出來ぬのである、三昧といふのは梵語で三摩鉢底とも三摩地ともいひ、漢語に譯すれば正受とも正定ともいふので、正受とは正しく受くるので、如何なる場合に出遇つても實の如くに受けて、心が少しも動かぬのをいひ、正定とは正しく定る、間違のない落着で、今は眞如の妙處といふことゝ解してよろしい、胡繼宗といふ人の說に、「物皆三昧あり其妙處を謂ふ」というてあります。

復次依是三昧故則知法界一相謂一切諸佛法身與衆生

身平等無二、卽名一行三昧、當知眞如是三昧根本、若人修行、漸漸能生無量三昧、或有衆生無善根力、則爲諸魔外道鬼神之所惑亂、若於坐中、現形恐怖、或現端正男女等相、當念唯心、境界則滅、終不爲惱

復た次に、是の三昧に依るが故に、則ち法界一相なりと知る、謂く、一切の諸佛の法身と衆生身とは平等無二、卽ち一行三昧と名く、當に知るべし、眞如は是れ三昧の根本なり、若し人修行すれば漸々に能く無量の三昧を生ず、或は衆生有り、善根の力無ければ則ち諸魔外道鬼神の爲に惑亂せらる、若し坐中に於ては形を現じて恐怖し、或は端正の男女等の相を現ず、當に唯心を念ずべし、境界則ち滅して終に惱を爲さず。

これは止の功德を擧げたので、眞如三昧に入るときは法界一相で差別がない、卽ち一切の諸佛の法身と衆生の身と差別がなく平等無二であるから、これを一行三昧といふし、又此眞如三昧を修してゆけば漸々に無量三昧を生ずるのであるから、能く無量の三昧を生ずといひ、これを三昧の根本といふのです、「或は」以下は此止を修するのを妨ぐる魔障を擧げて、これを除くことを示したので、善根の力なきものは諸魔外道鬼神の爲めに惑亂せらるゝ、此諸魔鬼神外道は共に佛法に入るを妨ぐるもので、座中に恐るべき身を現じてこれを怖れしめ、或は美しき男女となつて之を惑はして人心を動亂することがある、此時には「當に唯心を念ずべし」で、一切の諸境悉くこれ自身なり、何ぞ況んや座中の諸境をやとの覺悟を以て、すべての境界を唯心と觀察すれば、魔境隨て滅して亂さるゝことはない。

或現天像菩薩像、亦作如來像、相好具足、若說陀羅尼、若說布施持戒忍辱精進禪定智慧、或說平等空無相無願無怨無親無因無果畢竟空寂是眞涅槃、或令人知宿命過去之事、亦知未來之事、得他心智辨才無礙、能令衆生貪著世間名利之事、又令人數瞋數喜性無常準、或多慈愛多睡多病其心懈怠、或卒起精進、後便休廢、生於不信、多疑多慮、或捨本勝行、更修雜業、若著世事種種牽纏、亦能使人得諸三

味少分相似皆是外道所得非眞三昧或復令人若一日若二日若三日乃至七日住於定中得自然香美飲食身心適悅不飢不渴使人愛著或令人食無分齊乍多乍少顏色變異以是義故行者常應智慧觀察勿令此心墮於邪網當勤正念不取不著則能遠離是諸業障

或は天像菩薩の像を現じ、亦は如來の像を作し、相好具足し、若くは陀羅尼を說き、若くは布施、持戒、忍辱、精進、禪定、智慧を說き、或は平等、空無相、無願、無縁、無親、無因、無果、畢竟空寂なる、是れ眞の涅槃なりと說き、或は人をして宿命過去の事を知り、亦、未來の事を知り、他心智辯才無礙を得しめ、能く衆生をして世間の名利の事に貪著せしむ、又、人をして數々瞋り、數々喜んで性、常準無からしめ、或は多く慈愛、多睡、多病にして其の心懈怠ならしむ、或は卒に精進を起し後便ち休廢し、不信を生じて多疑、多慮或は本の勝行を捨て更に雜業を修す、若くは世事に著して種々に牽纏す、亦能く人をして諸の三昧の少分の相似を得しむ、皆な是れ外道の所得にして眞の三昧に非ず、或は復た人をして若くは一日、若くは二日、若くは三日乃至七日、定中に住して自然の香美の飲食を得て、身心適悅して不飢不渴ならしめ、人をして愛著せしむ、或は人をして食、分齊無く乍に多く、乍に少くして顏色變異せしむ、是の義を以ての故に、行者常に知慧觀察して此の心をして邪網に墮せしむること勿るべし、當に勤めて正念にして不取、不著なるときは則ち能く是の諸の業障を遠離すべし。

これは魔事を擧げたので、文の如く見るより外に仕方はない、魔が佛の如くにして來り惑はすことがあるのであるから、正邪を辨明するのがなか〳〵むづかしい、そこで「義記」には古德の相傳によりて略して三法を擧ぐとて、一には定を以て研磨して見るので、正ならば定力いよ〳〵深きに從ひ、善根いよ〳〵增さんも、魔事であるならば久しからずして壞するのである、二には本に依て修治すで、其正しき本によつて修治して行つて、其境界が明ならば正、然らずんば邪といふやうに辨別する、三は智慧觀察で其根源を觀察して正邪を分つのである、併しこれらのことをこゝに精しくいふ必要はない、佛の如き相を以て魔が來ることをいふたので、それからいろ〳〵な魔障を擧げたのだが、それを一々いふのも必要でないから、こゝには略しておく、さてこれらの魔障に對して「是の義を以ての故に」以下が對治の方法である、それは、行者常に智慧觀察して此心をして邪網に墮せしむること

と勿れで、自分の分に隨つて覽えたる智慧を以て諸の魔事を見、義記にいふ如く「其所發の相を觀じ根源を推驗するに、生所を見ず、深く空寂と知て心住着せずんば邪は當に自ら滅すべし、正は當に自ら現ずべし、眞金を燒て其光色を益すが如し、若し是れ僞金ならば當に焦壞すべし」で、能く觀察して邪道に墮ちぬやうにし、「正念にして不取不着なる時は則ち能く是の諸の業障を遠離す」とあるは、定を以て研磨し本によつて修治するので正しく念じて執着せずして魔障を除くのである、若し執し着すれば正に背き邪に入る、執するとか着するとかいふのは分別の想で已に魔事に落ちたのです、智度論に「若し分別意想すれば卽ち是れ魔羅の網なり、動ぜず分別せざるは是れ卽ち印と爲す」とあるのは、この理を明したのです。

應知外道所有三昧、皆不離見愛我慢之心、貪著世間名利恭敬故、眞如三昧者、不住見相、不住得相、乃至出定亦無懈慢、所有煩惱、漸漸微薄、若諸凡夫不習此三昧法、得入如來種性、無有是處、以修世間諸禪三昧多起昧著、依於我見繫屬三界、與外道共、若離善知識所護、則起外道見故

應に知るべし、外道所有の三昧は皆な見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬を貪著するが故に、眞如三昧とは見相に住せず、得相に住せず、乃至定を出で、亦懈慢無し、所有の煩惱漸々に微薄なり、若し諸の凡夫、此の三昧の法を習せざれば如來の種性に入ることを得とも、是の處り有ることは無し、世間の諸禪三昧を修して多く昧著を起し、我見に依りて三界に繫屬するを以て外道と共にす、若し善知識の所護を離るれば則ち外道の見を起すが故に。

外道所有の三昧は見愛我慢の心を離れず、世間の名利恭敬に貪着するが、眞如三昧はこれらの心を離れて見相にも住せず、得相にも住せず、懈慢もなくあらゆる煩惱も漸次に微薄となるので、此眞如三昧こそ大乘菩薩の行を修するものの入るべき門で、これによつてこそ如來の種性に入つて退くことはないが、此三昧の法によらぬものは、「如來種性に入ることを得とも是の處あることなし」で、不退位となることは出來ない、又世間の諸禪三昧によりて此眞如三昧によらぬものは、多く境相に執着して我見を起し、直に外道の見を起

すやうになるのであるといふのが、此文の大意で眞如三昧の他に異ることを示したのぢや。

三昧の利益

復次精勤專心修學此三昧者、現世當得十種利益、云何爲一、一者常爲十方諸佛菩薩之所護念、二者不爲諸魔惡鬼所能恐怖、三者不爲九十五種外道鬼神之所惑亂、四者遠離誹謗甚深之法、重罪業障漸漸微薄、五者滅一切疑諸惡覺觀、六者於諸如來境界、信得增長、七者遠離憂悔、於生死中、勇猛不怯、八者其心柔和、捨於憍慢、不爲他人所惱、九者雖未得定、於一切時一切境界處、則能減損煩惱、不樂世間、十者若得三昧不爲外緣一切音聲之所驚動

復た次に、精勤して專心に此の三昧を修學する者は、現世に當に十種の利益を得べし、云何か十と爲す、一には常に十方の諸佛菩薩の爲めに護念せらる、二には諸魔惡鬼の爲めに能く恐怖せられず、三には九十五種の外道鬼神の爲めに惑亂せられず、四には甚深の法を誹謗することを遠離し、重罪業障漸々に微薄なり、五には一切の疑と諸の惡覺觀とを滅す、六には諸の如來の境界に於て、信增長することを得、七には憂悔を遠離し生死の中に於て勇猛不怯なり、八には其の心柔和にして憍慢を捨てゝ他人の爲めに惱せられず、九には未だ定を得ずと雖も一切の時、一切の境界の處に於て則ち能く煩惱を減損して世間を樂まず、十には若し三昧を得れば外緣一切音聲の爲に驚動せられず。

これは眞如三昧の利益十種を擧げたので、別に講ずるまでもない、卽ち（一）十方の諸佛菩薩に護念せらる、（二）諸魔惡鬼の爲めに恐れられ、（三）外道の爲めに惑はされず、（四）甚深の法を誹らず重罪業障も薄くなり、（五）一切の疑ひもなくなり、（六）信仰增長し、（七）勇猛不怯となり、（八）其心柔和に、（九）未だ定を得ざるも能く煩惱を減じ、（十）三昧を得れば外緣一切の音聲の爲めに驚動せられずで、ツマリ寂然不動湛々たる清水の如き心になることが出來る、以上は止觀の中の止の方を說いたので、これからは觀の方だ、

觀法

復次若人唯修於止、則心沈沒、或起懈怠、不樂衆善、遠離大悲、是故修觀

復た次に、若し人唯だ止を修すれば則ち心沈沒して或は懈怠を起し、衆善を樂はず、大悲を遠離す、

是の故に觀を修す。

止は心を一所に制して靜かに慮るのである。これのみでは其心が沈んで止水湛然たることは得やうが活動がない、そこで衆善を樂ます、大悲を遠離すで、自ら善を樂む心もなく、大慈悲を以て衆生を救ふ心もない、自利々他に失してしまうのである、凡そ大乘佛教は靜止的方面があると共に活動的方面がある、たゞ靜止したゞけでは鏡の曇はなくなつたが、まだ萬象を寫さぬやうなもので、鏡の鏡たる用はない、止のみで觀のないのも其通りで、大乘佛教の修行といふことが出來ない、こゝは能く注意してもらはねばならぬ。

修習觀者、當觀一切世間、有爲之法、無得久停、須臾變壞、一切心行、念念生滅、以是故苦應觀過去諸念、諸法恍忽如夢、應觀現在所念、諸法猶如電光、應觀未來所念諸法、猶如於雲、忽爾而起、應觀世間一切有身悉皆不淨、種種穢汚、無一可樂。

觀を修習するには當に一切世間の有爲の法に久しく停ることを得ること無く、須臾に變壞す、一切の心行は念々に生滅す、是を以ての故に苦なりと觀ずべし、應に過去所念の諸法は恍惚として夢の如しと觀ずべし、應に現在の所念の諸法は猶ほ電光の如しと觀ずべし、應に未來の所念の諸法は猶ほ雲の忽爾として起るが如しと觀ずべし、應に世間の一切の有身は悉く皆な不淨にして種々の穢汚、一として樂しむ可き無しと觀ずべし。

これは觀相を明したので、これに四あり、無常觀、苦觀、無我觀、不淨觀これである、初めに一切世間有爲の法は久く停ることなしとある、昨日の淵は今日の瀬と變る慣ひで、須臾に變壞するのが無常、一切の心行は念々に生滅して樂しと思ふことも、泡沫のあわと消ゆるが苦觀、過去は夢の如く、現在は電の如くに過ぎ、未來の法は雲のたちまちに起るが如く、皆なこれ因緣の所生で別に定まつた常一主宰の我といふがあるではない、これが無我觀、さて又我が身とて淨らかなものでなく、種々の穢れによつて成るものぞと觀ずるが不淨觀である、この四つを法相觀といひます、これをかく觀せずして常なり、樂なり、我なり、淨なりと感ずるのが凡夫の常である、これを四顚倒といふ。

如是當念一切衆生從無始世來皆因無明所熏習故令心生滅已受一切身心大苦現在卽有無量逼迫未來所苦亦無分齊難捨難離而不覺知衆生如是甚爲可愍作是思惟卽應勇猛立大誓願願令我心離分別故徧於十方修行一切諸善功德盡其未來以無量方便救拔一切苦惱衆生令得涅槃第一義樂以起如是願故於一切時一切處所有衆善隨己堪能不捨修學心無懈怠唯除坐時專念於止若餘一切悉當觀察應作不應作

是の如く、當に念ずべし、一切の衆生は無始の世より來、皆無明に熏習せらるゝに因るが故に心をして生滅せしむ、已に一切の身心の大苦を受け、現在に卽ち無量の逼迫有り、未來の所苦亦、分齊無く捨て難く、離れ難くして、而も覺知せず、衆生是の如し、甚だ愍む可しと爲す、是の思惟を作し、卽ち應に勇猛に大誓願を立つべし、願はくば我が心をして分別を離れしむるが故に、十方に徧ねく一切諸の善功德を修行し、其の未來を盡して無量の方便を以て、一切の苦惱の衆生を救拔して涅槃第一義の樂を得しむ、是の如きの願を起すを以ての故に一切時一切處に於て、所有の衆善は己れが堪能するに隨つて修學を捨てず、心に懈怠無し、唯だ坐する時、止を專念するを除く、若し余の一切には悉く當に應作と不應作とを觀察すべし。

法相觀の四つは自分の修行の爲めであるが、こゝに說いてあるのは、一切衆生を哀愍する利他の方の觀察である、これに三つある、第一は大悲觀で、一切の衆生は無始このかた、無明の爲めに熏習せられて生滅を免るゝことが出來ないものであるから、身心に大苦を受けて、現在未來とも限りなく苦み、さて又其苦を離るゝことが出來ぬのを、それと知らずに夢の如くに過ぎてゆくのは、如何にも憐れであると觀察するのをいふのであります、第二は大願觀で、此憐れな衆生をしてどうかして一切の苦惱を離れて、涅槃の樂を得せしめむと、大勇猛の心を以て大誓願を立て、一切の善を修し無量の方便を以てこのことを遂げやうとするのです、第三は精進觀で、此の如き願を起して如何なる時、如何なる所に於ても、己れが出來得るに隨ひ、善といふ善を行ひ、端座して止を專念する外は作すべき、（眞如

の理に順じたるをいふ）作すべからざる、（眞如の理に背くをいふ）を觀察して怠るなきを
いひます、以上で止觀を明しました、今これを表に示して解し易からしむることをします。

- 止觀
  - 止（靜止的主觀的）
  - 觀（活動的、客觀的）
    - 自利（法相觀）
      - 無常觀
      - 苦觀
      - 無我觀
      - 不淨觀
    - 利他
      - 大悲觀
      - 大願觀
      - 精進觀

併しこの止と觀とは離るべきものではありませぬ、ソコデ、

若行、若住、若坐、若臥、若起、皆應止觀俱行、所謂雖念諸法自性不生而復卽念因緣和合善惡之業、苦樂等報、不失不壞

雖念因緣善惡業報、而亦卽念性不可得、若修止者、對治凡夫住著世間、能捨二乘怯弱之見、若修觀者、對治二乘不起大悲狹劣心過、遠離凡夫不修善根、以此義故、是止觀門、共相助成、不相捨離、若止觀不具、則無能入菩提之道、

若くは行、若くは住、若くは坐、若くは臥、若くは起、皆な止觀俱行すべし、所謂、諸法の自性不生を念ずと雖も、而も復た卽ち因緣和合して善惡の業、苦樂業報失せず、壞せずと念ず、因緣善惡の業報を念ずと雖も、而も亦た卽ち性不可得なりと念ず、若し止を修すれば凡夫の世間に住著するを對治し、能く二乘の怯弱の見を捨つ、若し觀を修すれば二乘、大悲を起さゞる狹劣の心過を對治し、凡夫の善根を修せざるを遠離す、此の義を以ての故に是の止觀門、共に相ひ助成し相ひ捨離せず、若し止觀具せざれば則ち能く菩提の道に入ること無し。

これは止觀の二の不離なることを示したので、諸法の自性は不生なりと念ずるのは止で、明皎々たる鏡一點の曇がない、この曇のない所にさま〳〵な因緣和合によつて善惡の業、苦樂の報がうつる、これは觀である、寫つたからとて不生の體、は妨げぬ、そこで失せず

壞せずと念ずとあり、又因緣善惡の業報を念ずと雖も而も亦性不可得なりと念ずとあるので、この二は決して離るべきものでなきことと、平等そのまゝに差別、差別そのまゝに平等、此平等の體に入るは止、差別の法を觀察するは觀である、止を修すれば差別に執着し、世間に住着する凡夫の心を對治し、又二乘の卑怯なる見を捨て、觀を修すれば、自利のみで利他を忘れる二乘の陋劣なるを對治し、凡夫の善根を修せざるを離れて、自利利他兼備することが出來るのであるから、此二門相助けて離るゝことの出來るものでない、鳥の双翼、車の兩輪の如く止と觀との二つの中、一つを具せなければ菩提の道に入ることは出來ぬのであるから、行住坐臥、寢ても起きても此止觀を俱行せねばなりませぬ。

以上で五行を說きました、併しこれらの修行はなか〳〵困難で、われ〳〵凡夫の及びもつかぬことであります、こゝに於て更らに易行の門を開いて示されてあります。

復次衆生初學是法欲求正信其心怯弱以住於此娑婆世界自畏不能常値諸佛親承供養懼謂信心難可成就意欲退者當知如來有勝方便攝護信心謂以專意念佛因緣隨願得生他方佛土常見於佛永離惡道如修多羅說若人專念西方極樂世界阿彌陀佛所修善根廻向願求生彼世界即得往生常見佛故終無有退若觀彼佛眞如法身常勤修習畢竟得生住正定故

復た次に衆生、初めて是の法を學し、正信を欲求するに其の心怯弱なり、此の娑婆世界に住するを以て自から常に諸佛に値て親承し供養すること能はざることを畏れ、懼れて信心成就す可き難しと謂て意、退せんと欲する者は、當に知るべし、如來勝方便あり、信心を攝護す、謂く意を專にし、佛を念ずる因緣を以て、願に隨ひ他方の佛土に生ずることを得て、常に佛を見て永く惡道を離る、修多羅に說く如し、若し人專ら西方極樂世界の阿彌陀佛を念じ、所修の善根を廻向して彼の世界に生れんと願求すれば即ち往生することを得、常に佛を見るが故に終に退すること有ること無し、若し彼の佛の眞如法身を觀じて常に勤めて修習すれば畢竟じて生ずることを得、正定に住するが故に。

これは他力の方を示したので、衆生初めて是の法を察し、正しき信を欲求するとも其心

怯弱にして、到底止觀のやうなむづかしい行の出來ぬものがある、これらは此誘惑多き娑婆世界の免れぬところで、善人ばかりに交れば自然に善行の出來るものであるが、われわれお互の住んでをる世界はいろ〳〵な誘惑があつて、其信や行を妨げるものがある、ソコデ衆生の中には「自ら常に諸佛に値て親承し供養すること能はざるを畏み懼れて信心成就し難しとて意退せんとする者がないではない、如來は其爲めにこれら自力の外に他力淨土の法を說き、親しく佛に値ふて法を聞くことが出來、他に其修行を妨ぐべきものゝない極樂世界に往かしめて、永く惡道を離るゝことの出來るやうに示されてある、それにはどうすればよいかといふに、謂く意を專らにし佛を念ずる因緣を以て、願に隨ひ他方佛土に生ずることを得て、意を專らにして佛を念ずるといふ、簡易なる行が直に往生淨土することが出來るの因緣となるのだ、この事は大無量壽經や觀無量壽經阿彌陀經なぞに詳しいのである、されば本論にも修多羅に說くが如しと、經文を引用して、西方極樂世界の阿彌陀佛を專念し、彼の世界に往生せんと念じ、修むるところの善根をその爲に廻向すれば極樂世界に往生することが出來る、こゝには誘惑がないのであるから、退くことはなく、正定の位に住する事が出來るのである、此場合には自力修行と同じく佛の眞如法身を觀ることが出來るのである、抑も阿彌陀といふのは梵語で支那に譯せば無量壽無礙光で、量りなきことぶきとて時間的に無限、礙なき光とて空間的に無限である眞如を人格化したので、一念阿彌陀佛を念ずる時、直に宇宙平等の本躰たる眞如と合躰するのであるから、他方念佛の說も決して此起信論の本義と離れたものでない、この他方の說あつて本論は哲學的方面、道德的方面の外に、宗教的方面をも示してをるといふことが出來るのであります、されば法然上人は撰擇集の中に本論を以て傍明往生淨土敎としてあります、本論は上來自力のことをのみ說いてあるやうですが、此の一文によつて往生淨土のことを明し、自力と他力との關係の密接なことを示してをります。

二十五　勸修利益分(本論の利益)

長らく此話をいたしました、起信論も最早や終末になりました、これからが勸修利益分で、上來の說を信じ行ふときは其利益の廣大なるを示したのです、

利益

已說修行信心分次說勸修利益分、如是摩訶衍諸佛秘藏我已總說、若有衆生、欲於如來甚深境界、得生正信遠離誹謗入大乘道、當持此論思量修習究竟能至無上之道

已に修行信心分を說く、次に勸修利益分を說かん、是の如き摩訶衍は諸佛の秘藏なり、我れ已に總さに說く、若し衆生有りて如來の甚深の境界に於て正信を生ずることを得、誹謗を遠離して大乘の道に入らんと欲せば、當に此の論を持して思量し、修習し、究竟して、能く無上の道に至るべし。

この利益分は殆んど講ずるの必要はない、誰れでも讀めばわかるので、大乘甚深の道に入らんとするものは、此論を思量し修習してゆけば終に無上の道に入ることが出來るといふのです。

若人聞是法已不生怯弱、當知此人定紹佛種、必爲諸佛之所授記、假使有人、能化三千大千世界滿中衆生、令行十善、不如有人於一食頃正思此法過前功德不可爲喩

若し人是の法を聞き已つて怯弱を生ぜざれば、當に知るべし、此の人定めて佛種を紹ぎ、必ず諸佛の爲めに授記せらる、假使ひ人有りて能く三千大千世界の中に滿てる衆生を化して十善を行はしむとも如かず、人有りて一食の頃に於て、正しく此の法を思はゞ前の功德に過ぐること喩と爲す可からず。

これは此法を聞くの利益と、これを思量するの利益とを擧げたので、是大乘の法を聞て卑怯な心の起らないもの、佛種を紹ぐことが出來るといひ、若し人あつて三千大千世界の衆生に十善を行はしむるとも、其功德は一食の頃に此大乘の法を思ふには及ばぬといふのです、これらは此法の小乘其他に勝れてをることを形容したのである、次ぎに、

復次若人受持此論、觀察修行、若一日一夜、所有功德、無量無邊不可得說、假令十方一切諸佛、各於無量無邊阿僧祇劫歎其功德、亦不能盡、何以故、謂法性功德無有盡故此人功德亦復如是無有邊際、

復た次に若し人、此の論を受持し觀察修行し、若くは一日一夜せんには所有の功德無量無邊にして

說くことを得可からず、假令ひ、十方一切の諸佛、各々無量無邊阿僧祇劫に於て其の功德を歎ずるも亦盡すこと能はず、何を以ての故に、謂く、法性の功德盡ること有ること無きが故に此の人の功德亦復是の如く邊際有ること無し。

先きには思量するの利益を擧げたのだが、こゝでは修習するの利益を示したので、此論によつて觀察し修行すること一日一夜であつても、其功德は無量無邊である、何故かといふに法性の功德が盡くることがないのであるから、此法性に隨順してゆく此論の修行者の功德も亦無量無邊で、十方一切の諸佛が無量無邊阿僧祇劫に於て讃歎したもふとも、盡くすことは出來ないといふのである、以上は思量の修習する利益。

其有衆生、於此論中、毀謗不信、所獲罪報、經無量劫、受大苦惱、是故衆生、但應仰信、不應毀謗、以深自害亦害他人、斷絶一切三寶之種、以一切如來、皆依此法得涅槃故、一切菩薩、因之修行得入佛智故

其れ衆生有りて此の論中に於て毀謗して信ぜずば獲る所の罪報無量劫を經て大苦惱を受く、是の故に、衆生但だ仰で信ずべし、毀謗すべからず、深く自ら害し、亦他人を害して一切の三寶の種を斷絶するを以て、一切の如來皆な此の法に依りて涅槃を得るが故に、一切の菩薩之れに因りて修行して佛智に入ることを得るを以ての故に。

これは此論を謗るものゝ罪を示したので、毀謗て信ぜぬものは其の報は無量劫を經て、大苦惱を受けるから仰で之を信ぜよ、決して謗つてはならぬと勸め、若し此法を謗るものは自利利他の反對で、自害々他自ら害し、他人を害して一切三寶の種を斷つやうなことになる、何故かといふに一切の如來は此法によつて涅槃を得られ、一切の菩薩は此法に依て修行して佛智に入られたから、若し此法を誇らば菩提涅槃の法寶を初め、佛寶僧寶を斷つのである。

當知過去菩薩、已依此法得成淨信、未來菩薩、當依此法得成淨信、是故衆生應勤修學、

當に知るべし、過去の菩薩、已に此の法に依つて淨信を成ずることを得、現在の菩薩今此の法に依りて淨信を成ずることを得、未來の菩薩、當に此の法に依りて淨信を成ずることを得べし、是の故

に衆生應に勤めて修學すべし。

結末の偈

これは勸修分を結んだので、過去の菩薩も此法によつて淨信を得、現在の菩薩も未來の菩薩も亦此法によつて淨信を得るのであるから、一切の衆生も亦此法を修し學ばねばならぬのであります、そこで偈を說いて此書の結末として、

諸佛甚深廣大義、我今隨順總持說、
廻此功德、如法性、普利一切衆生界。

諸佛の甚深廣大の義、我れ今隨順し總持して說く、此の功德の如法性を廻らして、普ねく一切の衆生界を利せん。

諸佛の甚深廣大なる二乘の理を今總括して說いたのである、どうか此功德を眞如法性の功德に廻らして、普く一切衆生界を利益したいものであるといふのが、本論の著者馬鳴菩薩の偈である。

二十六　結　辭

結　辭

本論の佛敎中に於ける地位は已にお話し申した通りで、未だ最高といふのではないが、天台、華嚴、眞言等の佛敎甚深の理も、皆な本論の敎理を開發したのと見て差支ないのであるから、本論の佛敎中に於ける價値は非常なものである、それであるから、各宗の祖師方も皆な本論に重きを置いて、天台の慧澄律師の起信論義記講義にも、これは別敎を奉ずるものをして圓敎に入らしむるの意であるといひ、佛敎の極致ではないが、極致に入る門としてある、華嚴や眞言の見方も大同小異で、唯だ法相宗では此論が賴耶緣起より一歩を挺んでゝをるものであるから、終に馬鳴菩薩の著でないなどといふ說を爲すに至つた、古來本書を馬鳴菩薩の眞撰でないなぞといふのは、多く此法相宗側の人であるが、公平な學者は誰れも馬鳴の作たるを疑はぬ、併し此論は未だことごとく理を盡くしたのでないから古來諸種の批難のあるのは本論が未だ無盡緣起に入らず、しかも賴耶緣起を出でゝ此二者の過渡にあるからであらう、本論に於ての疑は更らに本論以上の佛典に入つて釋くがよいと思ひます。

本論の大要は前に申した通り、一心を出發點としてこれを心體と心相の二門に分ち、心

體を常住不滅とし心相も亦此本體の德を離れずとし、眞如熏習を說き、これに對して妄心を說いて妄を除き眞を現はすことを示し、其實踐として四信五行の自力を明し、別に他力念佛の便法を說いたので、佛敎の要を摘みて其玄を示したのであります、御存じの通り、佛敎はいつも甚深なる哲學的方面あると共に、倫理的實踐方面あり、又宗敎的信仰の方面があります、馬鳴は宇宙の實在を哲學的に眞如とし、これを宗敎的に如來と結合し、こゝに四信五行の實踐的方面となるので、此三方面が互に交錯して本論の價値をして一層高からしむるのであるが、今强て分けて見ると左の如くなります。

起信論
- 哲學的方面（一心二門三大）
- 實踐的方面
  - 倫理的方面（四信五行）
  - 宗敎的方面（念佛往生）

といふやうに見ることも出來ます、これで大要を示したのであるから、尙ほ此上の御研究を偏に祈ります。

大乘起信論講話　了

昭和十四年七月十日印刷
昭和十四年七月十五日發行
佛敎聖典を語る叢書（第十一卷）
【定價壹圓五拾錢】
著者　加藤唱堂
發行者　岩野眞雄　芝區芝公園七ノ十
印刷者　長尾文雄
印刷所　日進舍　芝區芝浦二ノ三
發行所　東京芝區芝公園七ノ十　大東出版社
振替東京一九四七一
電話芝(45)三九四四

倉田百三著（忽六版）四六判三四〇頁 一圓卅錢・送十二錢

青春の息のあと

或る神學青年の手紙の束

青春三人の友の間に醸し出された世にも麗しき高雅純情の書。フイリップの青春の手紙集よりも美しく淨いと、批評家や文學愛好の士は悉く絶讃してゐる。

倉田百三先生著

生活と一枚の宗教　四六判二六〇頁 一圓卅錢・送十二錢

附・治らずに治つた私の體驗

創作　親鸞聖人　四六判四四〇頁 一圓五十錢・送十四錢

法然と親鸞の信仰　四六判五〇〇頁 一圓八十錢・送十四錢

一枚起請文と歎異鈔

大乘精神の政治的展開　四六判三五〇頁 一圓五十錢・送十四錢

大東出版社刊行

390

終